

下層階級の漢文世界は『本朝文粹』的漢文世界とどのように対峙するのか
—庶民性・在地性を切り口に—

三木雅博

平安朝漢文学の担い手といえ、大学寮で高度な漢学の研鑽を積み、漢語を自在に用いて作詩や作文が行える文人官僚たちを、多くの人は思い浮かべるであろう。菅原道真はその筆頭に位置し、その跡を継ぐ者として大江朝綱や大江匡衡、菅原文時、院政期に降っては大江匡房などの名が代表的存在として挙げられる。

しかし、平安時代、漢語を用いて漢文を綴っていたのは、これらの名だたる文人官僚たちばかりではない。これらの文人官僚たちの下、朝廷で下働きをする官人、あるいは地方の国衙やその出先で働く在地の官人、都や地方の寺院で文書の作成に携わる僧侶など、多くの場所に様々な漢文を綴ることを生業にしていた人々がいた。こうした人たちが作成する漢文の大半は日常的な文書の類であり、その役目が終わると廃棄されてしまい、残されたものも歴史の「史料」とはなっても「作品」と呼べるものはほとんど残っていない。とはいえ、中にはそう呼べるものもいくつか存在し—『将門記』『尾張国解文』『仲文章』などが挙げられる—、細々とであるが現在まで伝わっている。

本発表では、こうした下層の官人や僧侶たちが生み出したと思われる作品や、その作品を形成している漢文の世界に焦点をあて、それらが前述の名だたる文人官僚たちの作成した漢文作品—その代表作が収められた書物『本朝文粹』の名を取り「『本朝文粹』的漢文世界」と仮称する—とどのような関係にあるのかを述べ、こうした下層階級の漢文作品の存在意義について考えてみたい。具体的には以下のような内容・手順で発表を行いたい。

1. 下層階級の漢文世界が生み出した作品
2. 下層階級の漢文作品の表現の特徴
3. 下層階級の漢文作品の存在意義(1)—庶民性
4. 下層階級の漢文作品の存在意義(2)—在地性
5. 下層階級の漢文世界と『本朝文粹』的漢文世界の接続
6. 下層階級の漢文世界の継承と展開—院政期・中世における開花